
こ、これは一体どうしたものか...

ユーユームー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こ、これは一体どうしたものか…

【Nコード】

N4477BA

【作者名】

ユーユームー

【あらすじ】

天谷晴也の日常がおかしくなったのは、とある出来事からだった。彼の所属する部活の部長”朝香優美”。その部長が突然子供になっ
てしまう。

そして子供になった部長、何とかするべく頑張る部員達。

こうして彼の非日常への歯車が少しずつ動き出してゆく……

1 ユウミロリータ

ある日突然、自分の知り合いが小さくなっていたらどう思うだろうか。

いや、もう少し正確に言おう。

ある日突然、自分の知り合いが小学生体系になっていたらどう思うだろうか。

日本中にある高校と比べ、特にこれといって大差がない普通の高校がある。

星彩高校。つまり、自分の通っている高校だ。

山の頂上に建っているわけでも、人気の無い危険な空気が流れている場所に建っているわけでもない、普通の高校だ。

そんな星彩学園の3階一番東にある小さな教室には、部員5人（一人は幽霊部員）というそれはそれは小さな部活動が行われている。

第二ボランティア部。

一応言っておくと、「第二」というのはあくまで飾りであり、「第一ボランティア部」というのは存在しないわけだが、そんな部活動に俺 あまや 天谷晴也 せいや も参加している。

入部した理由は特になく、あるとすれば「誘われた」といったところだろうか。

「おーす」

「お、やっと来たか晴也^{せいや}」

「まったくもお。なんでいつもいつもドベで来るのよ」
「……………」

いざ第二ボランテイヤ部へと足を運んでみると、そこにはもう俺以外の部員は（但幽霊部員除く）全員来ていた。

部室は椅子が数個に長机が2つL字に並べられている。あとは色々な教科の古い参考書とチョークが無い黒板といったまさにシンブルと言つにふさわしい室内となっている。

しかし場所が3階にあるだけに日当たりは良好、窓を開ければ風通しは抜群だ。

とりあえず俺はカバンを長机の隅に置き、空いた椅子を見つげ座ることにした。

「で、今日は何かするの？」

部室へ来たもののやることがなければ意味がない。

ひとまず俺は我が部活動の部長へと声をかけた。

「何って、いつも通り何もしないけど」

「……………だよね」

朝香優美^{あさか ゆうみ}。第二ボランテイヤ部の部長である。

肩くらいまで伸びたセミロングに左目下に泣きぼくろ、そしてその泣きぼくろの約2センチ程下にもぼくろがあるぼくろ星人なのである。

ちなみに本人の前でぼくろの話をする、容赦無く背負い投げギロチンドロップと鮮やかな必殺コンボを決められてしまう。

無論、経験済みだ。

「それじゃ、今日も各自下校時間まで自由行動ね」

部活内容。下校時間まで自由行動。

これが我が部の日々の部活メニューである。

要するに「第二」も「ボランティア部」もただの飾り名というわけだ。

部長の朝香優美は「部活って遊ぶためにあるんでしょ？」と、全高校生の恥と言つべき発言を実体化した結果がこの第二ボランティア部なのだ。

一応学校にはボランティア部と認知されているため、たまに花壇の掃除や水やり、体育祭が近づけばその準備を手伝わされたりはするんだけど。

「自由行動って言ってもなあ。暇だし帰ってもいいか？」

「殺すわよ」

「すいません……」

光の速さで朝香に謝っているのは、僕の中学から付き合いにして最大の悪友 安芸鉄平だ。

なぜか自分の名前にコンプレックスを抱いているガラスの心の持ち主と言ってもいい。

僕も朝香も鉄平も苗字が「あ行」ということもあり、去年同じクラスになってからはずっと授業中に話しては怒られてと馬鹿なことをやっている。

「それにしても暇だ。暇だ暇だ暇だ」

「あーもう、暇暇うるさい」

「だってそうだろ？ 毎日毎日自由行動だし、おまけに部活さぼったらジャーマンスプレックスだろ？ なんだよこの新手的拷問は！」

「しょうがないじゃない。部活はさぼらず毎日通うものよ」

「……いや、そりゃそうだけど」

「なあ御門^{みかど}? お前は暇じゃないのかよ。ずっと本^{ほん}読んでるけど」

「……………」

「あれっ、あの、僕の質問聞いてます?」

「……………チッ……………」

「あ、うん。ごめん。邪魔したごめん」

この学園には超お金持ちの社長令嬢がいる。

なぜそんなお金持ちなお嬢様がこんな庶民的な学校にいるのか。

そんなものは俺が知りたい。

そんな学園社長令嬢、御門小波^{みかど こなみ}はまさかのボランティア部の部員

であった。

知らない間に入部していたから俺はなぜこの部に来たのかは知らない。けど、これだけは言える。

御門小波は部活中、本しか読まない。

部活中の約数時間。御門小波はだた一心不乱に本を読み続けている。

さっきのように声をかけると舌打ち、または「死ね」と罵倒されてしまう。

「あー」

すると朝香は何か反応するかのようにはり声をあげる。

「何だ、下痢^{げじ}か」

「フンッ!……………」

「キョ!?!」

鉄平が口を開いたとほぼ同時に、朝香から鋭い裏拳が彼の顎を的確に衝突した。鉄平は奇声と共に床に崩れ落ち、朝香は顔を真っ赤にしつつも言い放った。

「な、何女子に向かって汚いセリフぶつけてんのよ！ ノートよ、ノート！ 古典の課題に必要なノートを机の中に入れっぱなしにしてたの思いだしたのよ！」

「…………え？」

いつも朝香は授業で出された課題を滅多に提出しない。理由は「やったら負けだと思ってるから」と、その発言がすでに負けてます宣言を言っってはやり忘れていることを誤魔化している。そんな朝香から課題のノートという単語が出てきたため、俺は思わず聞き返してしまった。

「何よその『何コイツ嘘ついてんの？』って顔は。どうやらあんたも安芸みたいになりたいよね」

「違う違う！ 誤解だから誤解！」

「…………まあいいわ。ちよっと取ってくる」

「い、いってら……………」

小言で愚痴愚痴呟きながらも朝香は教室から出て行った。

とりあえず俺は鉄平をそのまま放置し、忘れていたようだから持ってきていた朝香のノートをこっそりとカバンの中へと入れた。

朝香あさかが戻ってきたのは部屋を出て5分も経たなかった。意味もなく朝香は走ったらしく、廊下からたつたつと上履きが廊下を叩く音を聞き、とりあえず朝香のノートを俺が持っていた、ということをごう謝るうか考えていると部屋のドアは思いっきり開け放たれた。

「もー、のーとなんかないじゃないの！」
「あー悪い朝香、それなんだが」

俺は朝香の姿を見て言葉を止めた。止まってしまった。俺の様子を見た御門小波も朝香の姿を見た瞬間、口を開けたまま静止してしまった。

ちなみに鉄平は、気を失っている。

「それってなによ、それって。それにあたしのごとはユウミンってよばないとめっ！　なんだから」

「お、おい朝香……」
「だからユウミンって呼ばなきゃめっー！」

ドアを開け放った朝香。

しかし、その朝香は朝香ではなく。

簡単に言い表すと、一人の小学生がドアの前に立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4477ba/>

こ、これは一体どうしたものか...

2012年1月12日01時00分発行